

ある想像力説のために

——G. バシュラール著
『蠟燭の焰』

河村 錠一郎

まず、筆者の独言から——

「想像力」ほどやっかいな代物はない。が、これがなければ、人間は一步も進めない。飛行機の発明以前に、ヒコークなる映像が想像されていたからこそ、ヒコークは飛行機として存在しうようになった。「詩」は「科学」に先行する、といった類の、このような高邁にして平々凡々たる事柄を、いまさら繰り返すこともない。勤め先きからわが家へ向かう人間の足取り、ただ歩くだけの動作、それさえ「想像力」なしには行なわれえない、といえ、奇を街っているだろうか。この右足の一步は、次なる左足の一步を導くと人は「想像」する。あの角を左へ曲がれば赤いポストがある、と「想像」する。帰巣本能を形づくっているものは、こうして、他ならぬ想像力である。そこにわが家がある、と想像して足を運ぶ。が、昼火事で跡形もなく消え失せて

いるかもしれない。「想像力」の流れが外部的要因によってとだえたとき、ある激しい暴力によって流れが拉致されたとき、一つの空白が生じる。心的作用のあらゆる要素がこの空白を、空間を埋めようとして殺到する。これが、感情の正体である。「感情」も、単なるごくありきたりの「感情」であっても、想像力以前には存在しない。

「想像力」のかわりに、「経験」・「推理」あるいは「記憶」といった言葉で説明しようことがらばかりではないか、という反論が「想像」される。しかし「経験」ののちに「想像力」が「経験」を土台ないし素材にして働くだけではない。「想像力」は「経験」以前である。歩いた経験のないもの、「アンヨ」なる名辞すら初耳で、したがって彼にとって名辞ではない「アンヨ」をする赤児を動かす力は「経験」以前である。人はここで「本能」を持ち出す。しかし「本能」を本能たらしめるのは「想像力」である。赤児は、右足を一步前へ出したらどうなるか「想像」する。その時、彼は自分と空間の関係を「関係づけ」ようとしているのだ。

「想像力」をもっとも豊かに持つものは詩人である。「詩」は「想像力」の産物だ。それは「創造力」の産物だ、というに等しい。「想像力」——「創造力」、これは日本語の美しい勝利の一例であり、日本人の「想像力」のみごとな開花の一つである。なぜなら、言葉こそ想像力最大の産物なのだから。もう一度つぎのことばを繰り返して、この独言をひとまず打ち切りたい——その時、彼は自分と空間の関係を「関係づけ」ようとしている。

さて、G. バシュラール著沢沢孝輔氏訳の『蠟燭の焰』は、詩人の魔力である「想像力」の正体を明かしてくれるかのような、それこそ世界の秘宝の埋蔵してある、隠された金庫の鍵を与えてくれるかのような、魅惑の光と

戦きの闇に包まれて、読者を誘う。帯に曰く、「詩的想像力とはなにか」と。与えられる回答はただひとつ、「それは蠟燭の焰である。」

バシュラルのこの著書全体が、「最大の映像作因のひとつ」(同訳書7ページ)である焰そのものである。それは地球を隅なく照らす太陽ではなく、闇に一条の光を立ち昇らせる蠟燭の焰であり、焰を焰という以外、たとえば、構成物質は水蒸気何パーセント炭素粒子何パーセントなどと、けっして分析してはくれない。バシュラルのすべては次の一文につきる——「夢想家!——われわれの存在のこの影、思索する存在のこの明暗部——」(同書14ページ)、いま少し散文的ないいかえを取るなら——「ランプの夢想家は、小さな光のイマージュというものが内面の燈明であることを本能的に理解するだろう。そのほの明りは、思考が働き、意識がはっきりしている時には見えなくなる。けれども、思考が休止すればイマージュが見張るのだ。」(同書15ページ)

この最後の引用文の前半はネオ・プラトニズムで、後半はベルグソンのといえる。次の文の背後にはベルグソンのエラン・ヴィタルが躍動している——「焰についての瞑想は、生を高め、通常の質料のあらゆる衰退にもかかわらず、生を越えてさらに生を延ばすべき、一種の超生命的飛躍を見出す。」(同書90ページ)さらにいう、「確信の直接的性格」「詩人＝哲学者の燃え立つ直観」(同書87ページ、89ページ)。

そして、バシュラルの世界はまったく17世紀である。マニエリスムであり、バロックである。マニエリスム＝バロック文学がもっとも実り豊かな成果をあげた17世紀イギリス文学の一端を覗き見ている筆者には、少くともこのバシュラルの世界は前に何度か踏みこんだ世界のもつ親しみと肌の温もりを覚えさせる。と同時に、フランス人である

バシュラルが、もしイギリスの16・17世紀文学から多くの用例をひいてきたならば、さらにこの著書の説得力が増したのではないかと感じる。しかし、これは身勝手なおねだりであろう。近代から現代に想像力説展開の素材を主として求めた本書であるが、17世紀の想像力を想像力説展開の起点とすることによって、「想像力」の超歴史性をあらわにしえたことが本書の勝利に他ならない。バシュラルはブレイズ・ドゥ・ヴィジュネールの『火および塩について』(1608年出版)における焰に関する考察を引用しながら、次のように解説をすすめる、それが「想像力のけたはずれの例」(同書38ページ)の一つとして述べられているだけでなく、つまるところ、著者自身の「想像力説」というより「想像力」についての瞑想の、目に見えぬ核心と指摘すべきものではないか、と思わせる——「ヴィジュネールがそうであったような焰の『思想家』にとっては、すべて事実(価値)の地平をひろくべきものである。……道徳的教訓もかくて間近にある。……よく燃えるものは高く燃える。意識も焰も同じ垂直性の運命をもっている。蠟燭の単純な焰(は……)“白以外の色にその光を変えることもなく、下界におけるおのれの行為を果したのち、決然として上に向かい、自己本来のすみかへと帰ってゆく”……この夢想家は、われわれがまさに範例現象と呼びうるころのものを、彼のテーブルの上にもっていたのである。」(同書40-41ページ) バシュラルがここにいう「範例現象」とは、17世紀英文学研究あるいは広くルネサンス研究の領域で普通「対応の世界」ないし「万物対応の宇宙観」と名づけているものと同義である。バシュラルはこれを次のように解説する——「物理的諸現象を司るすべての価値よりも、さらに大きなひとつの価値が戦いとられる……これが、焰と焰のイマージュが、世界の価値と同時に人

間の価値を示す理由である。それは、『小世界』の道徳性を、宇宙の荘厳な道徳性に結びつける」(同書 43 ページ)。日本では紹介されることのあまりにも少ない、精神史研究の大元締であるラヴジョイ教授一派のいうところの、マクロとミクロの対応という思考様式に他ならない。17 世紀イギリスの形而上詩人と呼ばれる人たちの想像力はたとえば次のようなものである——クラシウはキリストの死を嘆くマグダラのマリアをこう讃える、「融けゆく水晶 雪をいただく丘 / 汲めどもつきぬ 銀の小川を生みて止まぬ / ああうましの泉 / さこそやさしきマグダラのマリア 汝が美はしのまなこや // 汝が美はしのまなこは他ならぬ / 流れ星絶えぬ天つ空…… 神の御国の御水を / 汝が涙にてこそ人は知る……」G. ハーバートの晴れ渡った春の一日は、「隙間なくつめた香料の函」で、美しい徳をそなえた魂は反り歪むことのない「よく乾燥させた材木」である。

17 世紀の想像力の基本の型は、こうして「地と空の婚礼」(G. ハーバート『徳』)であるが、これを 17 世紀固有のものとかたづけすることは想像力についての考察の決定的な手がかりを放棄することになる。なぜなら、ノヴァーリスは「光が火をつくる」といい、「焰の動物的本性」と記すことによって、「事実の物理学の支配下を去って、価値の物理学の支配下に入り」、20 世紀フランスの詩人ルイ・ギョームが樹々の王たる柏を「樹液の火刑柱」(Bûcher de sèves) と想像のこゝばを記すとき、彼は「3 語で火と水を結び」つけ、これによって「宇宙の矛盾の世界」が生まれ、「言語の偉大な勝利」が獲得されたからである(同書 87-102 ページ参照)。

では、想像とは「実在を隠喩化しながらそれを見つめる」(同書 42 ページ) ことか？ バシュラールは一方で「比喩はイメージではない」と断わっている(同書 97 ページ)、

なぜなら、想像力をわれわれが問題とすると、「隠喩はすべて実在」(同書 42 ページ)であるからだ。「想像力を働かせることのないう人びととの論戦など実は暇つぶしにしかないほど、想像力というものは、新しいイメージを得る時、世界の真実をしっかりと把握してしまう。むしろ想像する者にとっては、同じように想像する者に向かって話しかけながら、植物的生命の焰に関する若々しいフレーズを、何度でも、つきることなく語る方がよいのだ」(同書 99 ページ)と著者自らいうように、『蠟燭の焰』は、焰と焰をめぐる、あるいはむしろ焰のかきたてる想像力に関する「若々しいフレーズ」の、断章の集まりである。積分であるから、理の当然として微分が前提とされる。だが、バシュラールの微積分は詩人の気まぐれに似た計量しない計量で、変数値としては中世から現代に至る詩人・哲学者の、焰の、宇宙の、瞑想をとりながら、自らの想像力函数をさだかに提示しようとはしない。

だが、晦渋をもってなる、あるいは華麗なる美をもってなる壮大な作品を生み出した想像力も、きわめて始原的な、単純素朴な、ただ文明というきんきらきんの金属音をまきちらす雷によってのみ暗黒の洞穴に押しこめられて見えないものとなっている、魂の状況、心的運動と様態そのもの、と垂直につながっているということだけは、たしかなようである。

そしてまた筆者の独言——関係によって人間の魂は宇宙を自らのうちへ封じこめようとする。それはいいかえるなら無限の拡大化だ。想像力は関係を取りつけることによる宇宙の封じこめと自己の無限の拡大化を志す魂の働きだ。なぜそのようなことを魂は志すのか。「関係をとりつけ」出したとき、それが悟性の出発である。魂の存在は悟性以前だ。魂が自らについて思いをめぐらすとき、関係をとりつけ出す以前の自分に、存在の根底のあり

かを探る。「関係をとりつける以前」それはすべての関係をとりつけ完了しおえることによってのみ再現されるとしか、歩きはじめての魂には考えられない。「すべての関係をとりつけ完了しおえる」——この壮大な、険しい魂の志こそ、「想像力」といえまいか。関係はまず空間的で、ついで時間の座標軸が組みこまれる——

博学にして鋭敏な哲学者バシュラールの、極めてユニークな著書を評すべく、もはや、その空間も時間もつきたようである。ただひとこと蛇足めくが、焰やランプのイメージを古今東西の詩から引用しているところで、「アルセーヌ・ソレイユが引用しているある

東方の詩人の詩句によれば、『オレンジは庭のランプである』と記しているが(同書107ページ)、この東方の詩人とはいったいだれなのか興味がわく。ここは、オレンジとランプをめぐる想像力の、世界でもっとも美しい所産の一つといえる、17世紀イギリスの詩人マーヴェルの次の詩句と替えてもよかったのだから——

神は森に色鮮かなオレンジを吊りさげる
緑の夜の黄金のランプさながら

(『バーミューダ島』より)

G.バシュラール著 沢沢孝輔訳『蠟燭の焰』1966年刊、現代思潮社。